

第14回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同推進賞受賞者

標記の賞につき、会員の皆さまによりご推薦いただいた候補のなかから選考の結果、2020年度は学会賞1件、推進賞1件の下記授賞を決定いたしました。今後とも本賞の発展にご協力くださいますよう、お願いいたします。

◆第14回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞

[賞の概要]

『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』、その他の雑誌に掲載の論文・記事、図書、データベース、展覧会、ウェブサイトのなかから優れたものを選出。会員に限らない。対象となる論文・記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去3年間に発表されたものとする。

受賞	<p>宮崎 幹子 氏 (奈良国立博物館)</p> <p>特別陳列「重要文化財 法隆寺金堂壁画写真ガラス原板 ―文化財写真の軌跡―」開催 (於奈良国立博物館 2019年12月7日-2020年1月13日) および同図録刊行に対して</p>
授賞理由	<p>本展示は、飛鳥時代の絵画を代表する法隆寺金堂壁画を撮影したガラス原板一式が、2017年に重要文化財に指定されたのを機に企画された。文化財保護において写真が果たした役割を、ガラス原板、焼付写真、アルバム、刊行物などの多様な資料によって通観するとともに、1949年の火災によって焼損した法隆寺金堂壁画の旧状を子細にうかがうことのできる高品質な情報の記録とそれを可能にした撮影・印刷技術を、原板自体や撮影機材、成果物によって紹介している。また比較のために、明治以来の手写彩色による高精度の模写作品数種を併せて展示している。</p> <p>写真が、近代化の緒についた日本で失われつつあった文化財を視覚的に記録する最新の技術として大きな役割を果たしたことは、しばしば説かれるところだが、本展示は研究史を踏まえながら、その歴史的経過を幅広い実物資料によって説得的に示している。また、法隆寺金堂壁画の高精細写真による記録は、損傷した文化財のかけがえのなさをあらためて痛感させられると同時に、画像による文化財のドキュメンテーションの意義を雄弁に物語る。開催にあたって刊行された図録は、研究者のみならず写真技師、修理技術者などを含む関係者の業務上の成果と知見が反映しており、今後長く参照される資料となるであろう。以上の点から、本展示及び図録について、アート・ドキュメンテーション学会賞を授与するにふさわしい。</p>

◆第14回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞

[賞の概要]

アート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者、あるいは機関を選出。会員に限らない。

受賞	<p>文化財写真技術研究会</p> <p>30年にわたり文化財写真の撮影技術と保存・管理・公開方法の向上に寄与してきた実績に対して</p>
授賞理由	<p>文化財写真技術研究会は、1989年に「埋蔵文化財写真技術研究会」として発足、2019年に創立30周年を迎えた。開発に伴って相次いだ埋蔵文化財調査に奔走していた調査担当者や写真技師の間で、情報や意見の交換と技術の向上を図るために発足したものである。まもなく奈良国立文化財研究所(奈文研)に活動の中心を移し、奈文研の技術的な研修と連携するとともに、会独自の講習会を各地で継続的に開催し、全国の文化財担当者への写真技術の普及に大きな役割を果たしてきた。またデジタル写真の急速な普及にともなう真正性の確保、長期保存、公開といった課題に取り組み、2003年には「文化財写真規範」を定めて、文化財写真に携わる者の倫理的な立場を明らかにしている。さらに、博物館資料や美術工芸品といった幅広い文化財が対象となってきたことに対応して、2010年には会名を現名称に改め、活動の領域を広げている。</p> <p>このように本会は、文化財を含む情報を記録する写真に求められる独自の課題を、社会の変化や技術の進展に対応しながら業務の当事者間で共有し、研修や機関誌『文化財写真研究』を通じて、継続的に公表してきた。30年にわたるその活動が、文化財写真の社会的な認知と知見の普及に果たした役割は大きく、アート・ドキュメンテーション推進賞を授与するにふさわしい。</p>